

コラージュ制作による自己理解効果の検討 —制作者の主観的体験から—

Effects of Self-Understanding in Collage Work —Based on Subjective Experiences—

文学研究科教育学専攻博士前期課程修了

齊 藤 勇

Yuu Saito

I. 問題と目的

1. コラージュとは

コラージュ (collage) とは現代美術の技法の一つであり、フランス語で「糊で貼り付ける」という意味である。鉛筆画や水彩画といった一般的な描画とは異なり、台紙の上に新聞紙や写真などを貼り付けて画面を構成する技法である。つまり、雑誌やパンフレットなどの既成のイメージ (レディ・メイド) をはさみで切り抜き、台紙の上で再構成し、糊づけするという方法である (森谷, 1999a)。

コラージュの手法自体は 20 世紀以前から存在していたが、新たな芸術のジャンルとして受け入れられるようになったのは 20 世紀になってからである (河本, 2007)。コラージュはピカソやブラックらが始めたパピエ・コレ (papier colle ; 貼り紙) という技法が元となっている。1912 年頃、ブラックによって新聞紙、楽譜、壁紙、切符などの紙を自由に組み合わせて貼るパピエ・コレが試みられた (入江, 1999)。

日本におけるコラージュ療法の原点は箱庭療法であり、「箱庭を持ち運び可能にできないか」という議論から生み出された (森谷, 1999b)。用意するものは、糊、はさみ、雑誌・新聞など、写真や文字、絵などが入っているもの、台紙 (A4～A3 判、B4～B3 判の画用紙またはケント紙) である。やり方は大きく分けて、コラージュ・ボックス法 (あらかじめセラピストが箱の中に入れておいた絵や写真、文字などの切り抜きを、制作者が箱の中から選び出して貼り付ける) と呼ばれる方法と、マガジン・ピクチャー・コラージュ法 (雑誌やパンフレットなどを用意し、制作者がそれらを切り抜く) と呼ばれる方法の二つが存在する。集団での実施も可能であり、数人のグループで一つの作品を制作する集団集団法、グループのメンバー一人ひとりがそれぞれの作品を作りグループ内で発表する集団個人法などの手法がある (青木, 2001)。

導入の際は、「これらの絵の切り抜き（雑誌など）の中から、自分の心引かれるもの、何か心に引っかかるものを選び出し、何枚か集めて台紙の上で構成してください。構成ができたなら、糊づけしてください」などといったように呼びかける。

コラージュ療法は、台紙・糊・雑誌類・はさみがあればどこでも実践できる簡便さを特長とし、作品の保存が可能であるため、後に制作者の理解を深めるのに役立つ（青木，2000）。また、箱庭療法とは異なり、多くの備品（ミニチュア・箱・砂）やそれらを保管するためのある程度の広さがある場所を必要としないことや、また心理治療に抵抗のあるクライアントにもレクリエーションのようなものとして受け入れられやすい利点がある。コラージュ療法は、児童相談所・教育相談所・学生相談室・精神科などで行われており、うつ病や摂食障害、神経性胃腸炎、心因性疼痛などの患者にも実施し効果を得ている（杉浦，1991）。

2. コラージュ療法の特徴と治療的要因

杉浦（1993）は、コラージュ療法の特徴として以下の6点を挙げている。

- ①台紙、はさみ、糊、雑誌などがあればいつでもどこでもできる。
- ②クライアントの身近にある雑誌などを持ってきてもらう場合は、よりその人の内的世界が出やすい。
- ③絵を描くことに抵抗のある人でも導入しやすい。
- ④技術的に簡単なので幼児から高齢者まで年齢を問わずにできる。
- ⑤知的な作業として捉えられるので成人男性でも抵抗が少ない。
- ⑥表現の仕方によって、その人の性格や感性、また状態像が把握できる。

また、杉浦（1991）は、心理臨床家にコラージュを制作させ、「作った感想」および「制作した経験から、どのような治療効果があると思われるか」について記述させ、その内容から、以下の7点をコラージュ療法の治療的要因としてまとめている。

- ①心理的退行（遊び的感觉が生じる）
- ②自己表出（台紙という守られた枠の中で自由に表現を行うことができる）
- ③内面の意識化
- ④自己表現と美意識の満足（自分の内面にあるものを表現できた喜びやバランスの取れた作品ができたときの喜び）
- ⑤非言語的要素（言語能力不足の補助など）
- ⑥診断材料

⑦ラポール、相互作用、コミュニケーションの媒介（作品を媒介としてラポールを形成したり、作品をもとに話すという相互作用によって治療的効果がある）

3. コラージュ療法に関する研究

コラージュ療法に関する研究は主に、アセスメントとしての可能性を追求した基礎的研究、コラージュ制作による効果を検討する研究、事例研究の三つに大別される。

（１）基礎的研究

杉浦（1992・1993）は、作品に使われた切り抜き数や空白の分量など、制作形式の分析（形式分析）と、どのような切り抜きが作品に使われているかという切り抜き内容の分析（内容分析）を行い、コラージュ作品の表現特徴を年代別に把握していく試みを行った。結果として、切り抜き数は発達とともに増え、老人群で極端に減少する傾向が見られた、食べ物の切り抜きが高年齢群で多くなった、などが示されている。

また、コラージュ作品の特性と制作者の性格特性との関連を検討した研究として、佐藤（2002）は、YG 性格検査の尺度得点とコラージュ作品・制作特性の指標との相関分析を試みている。その結果、制作者の性格特性とコラージュ作品特性との関連性を示唆する結果が得られた。

（２）効果研究

杉浦ら（1997）は、被験者 19 名を 5 グループに分け、グループで一枚のコラージュを制作し発表する集団コラージュ制作の効果を、POMS（Profile of Mood States；感情プロフィール検査）を用いて調べている。発表した後は、実施前と比較して「緊張－不安」、「抑うつ－落ち込み」、「怒り－敵意」などが低くなり、「活気」が上昇することが明らかになった。この結果は、集団コラージュ制作がストレスの解消やメンタルヘルスへの好影響に繋がっていることを示唆している。

コラージュ・アクティビティ（コラージュの制作行為）による効果を検討した研究も報告されている。作田（2009）は、コラージュ・アクティビティの中でも写真を「切り抜く行為」と「貼り付ける行為」に着目し、コラージュ制作においてどのような意味があるかを検討した。実験の前後に実施した感情尺度の数値を比較した結果、「切り抜く行為」を実施した被験者の「敵意」感情が大きく低下したという結果が示されている。

（３）事例研究

コラージュ療法は、日本において心理療法として確立されたため、不登校、うつ、統合失調症、神経症、摂食障害などへの治療的効果を示した事例が多い（青木，2005）。また、岡田・河野（1997）

は、「急性期の精神病状態をのぞけば、病態や知的水準、年齢、性別を問わず、ほとんどすべての症例への適応が可能であった」と述べている。そのほか、非行傾向を示す生徒に対しグループで制作するコラージュ療法を試み、自尊感情や自己効力感が高まった事例（西村，2006）も報告されている。

そのほか、コラージュ作品の形式・内容と制作者の特性との関連性からのコラージュ作品の解釈方法（佐野，2001・2002・2003）、統合失調症者のコラージュ表現について（今村，2001・2004）、摂食障害の患者に集団コラージュ制作の導入が対人交流の促進に有効であった事例（間島ら，2007）など、広く研究が行われている。

4. コラージュと自己理解

コラージュ療法は心理療法の場面やレクリエーションの一環として用いられているだけではなく、自己理解を目的に導入されることもある（青木，2000）。コラージュ研究の中で自己理解効果について言及したものは数少ないが、コラージュ制作による自己理解効果について触れた主な先行研究を以下に挙げる。

青木（2001）は大学生を対象にコラージュ制作を実施しており、制作後に感想を書かせている。「今、自分がどんな生活を送っているかがわかった」「自分がこんなことを考えていたのか…とみんなに口で説明している時に、自由に適当に貼っているのに一つ一つに意味があることが分かった」との記述を自己理解としてまとめている。

石口・島谷（2010）は、個人制作によるコラージュ継続制作における制作者の心理的過程について検討している。ここでは、コラージュの継続制作によって制作に取り組む自分自身が変化する可能性を示唆し、『自己像の表現』、『自分に対する再確認・気づき』についての変化を見出ししている。「継続的に制作していくことで自己の内面が深まってくる可能性がある」と考察している。

また、杉浦（1991）が挙げたコラージュ療法の治療的要因の一つである『内面の意識化』も、自己理解に当たると考えられる。コラージュを制作した心理臨床家からは、「作っていく過程で自分のある面に気づく」、「出来上がったあと、あらためて見直し話し合いをすることで自分自身の再確認ができるように思いました」、「無意識に漠然としていた考えがだんだんはつきりつかめるように思います」といった感想が述べられている。

5. 本研究の目的

本研究の目的は、コラージュ療法の自己理解効果について検討することである。先に挙げた先行研究（青木，2001、石口・島谷，2010、杉浦，1991）から、「コラージュを制作する過程で自己理解

が起こる」「出来上がったコラージュ作品について振り返り、話をすることによって自己理解が起こる」と考えられる。しかしこれらの研究では、制作者が自己理解するとき、どのような体験をしているかについて具体的に言及されておらず、自己理解体験についての詳細な概念が存在しない。制作者の自己理解体験について焦点を当てて検討することは、「見方に対する標準化が難しい(青木, 2000)」とされるコラージュ療法の知見をさらに深め、用途をより明快にする作業となると考えられる。そこで本研究では、コラージュ制作による自己理解効果について、制作者の主観的体験にもとづいて検討したい。自己理解体験についての詳細な概念が存在しないため、検討を行っていくためには、制作者本人の語りに着目し、主観的体験を詳細に汲み取ることのできる質的研究が有効であると思われる。コラージュ制作による自己理解は制作過程においてのみならず、制作後に作品について話す・振り返る過程においても起こりうると考えられる。そのため、本研究では以下のリサーチクエスチョンを挙げ、制作者の語りから検討する。

- ①コラージュ制作過程において制作者が自己理解するとき、制作者はどのようなことを体験しているのか
- ②コラージュ制作後、制作者が作品について振り返る中で自己理解するとき、制作者はどのようなことを体験しているのか

Ⅱ. 予備調査

1. 目的

コラージュ制作後に振り返りの時間を設け、作品についての話をするによって自己理解と関係する語りが得られるかどうかを検討することを目的とした。

2. 方法

(1) 研究協力者

大学生・大学院生 3 名（男性 2 名、女性 1 名、平均年齢 24.6 歳）。

(2) 手続き

マガジン・ピクチャー・コラージュ法を用い、特にテーマを決めず自由にコラージュを制作した後、作品についての振り返りとして半構造化面接を行った。また、面接の内容は、調査協力者から許可を得て録音し、逐語録を作成した。なお、コラージュ制作の際、「ここにある雑誌の写真や文字の中で

気になったものを切り抜いて、この画用紙の上に貼って一枚の絵を作ってみてください」と教示を行った。

（３）半構造化面接の質問項目

石口・島谷（2010）で用いられた質問項目から、制作者が自身の気持ちや自分らしさについて目を向け、自己理解を促すものであると考えられる質問項目を使用した。

- ① 作品のタイトルを教えてください。
- ② どのようなことを表現しようと思いましたか？
- ③ コラージュを作る前・作っている途中・作り終えて、どんなことを感じましたか？
- ④ 自分の作品らしいと思う点があれば教えてください。
- ⑤ 作品の中に、自分に近いものや自分自身そのものだと思うものはありますか？
もしあれば、そう感じる理由も教えてください。
- ⑥ コラージュを作ってみて、自分に対する意識の変化はありましたか？
- ⑦ その他、話したいことがあればお話ししてください。

３．結果と考察

半構造化面接の結果、自分らしさを把握している様子や、現在の自分と重ね合わせて考えている様子が見られた。そのほか、「気づきが定着するためには作っただけではダメで、よくよく考えていって、話していって聴いてもらって、自分の意識上にまで上ってくるところまで来るとすっきりできた気がする」、「話さないとここまでわからないと思う」、「自分を見つめる作業になる」などの語りが得られ、自己理解が促されたと考えられた。以上から、出来上がった作品についての話をすることで、自己理解につながる語りが得られるといえるだろう。

しかし、予備調査ではテーマを特に設定せずにコラージュ制作を行った。『自分』というテーマを設定すれば制作者が自分自身に焦点を当てながらコラージュを制作し、より自己理解に繋がる語りが得られる可能性があると考えられる。また、用いた質問項目は石口・島谷（2010）からそのまま引用したものであり、必ずしも自己理解体験について焦点を当てた質問ではない。さらに、予備調査の質問項目は、制作過程における自己理解体験について聴き取る側面にやや難があるように感じる。したがって、自己理解体験についてより焦点を当てた質問項目を考案・設定し直す必要があると思われる。

Ⅲ. 本調査

1. 目的

予備調査の結果を踏まえ、自己理解につながる語りを集めて分析し、コラージュ療法の自己理解効果について検討することを目的とした。

2. 方法

(1) 研究協力者

大学生・大学院生 12 名（男性 2 名、女性 10 名、平均年齢 22.3 歳）。

(2) 手続き

マガジン・ピクチャー・コラージュ法を用いて『自分』をテーマにコラージュを制作したのち、作品についての振り返りとして半構造化面接を行った。面接の内容については研究協力者の許可を得て録音し、逐語録を作成し分析を行った。なお、協力者にコラージュ制作を行ってもらった際、「ここにある雑誌の写真や文字の中で気になったものを切り抜いて、この画用紙の上に貼って一枚の絵を作ってみてください。今回は、『自分』をテーマに作ってください」と教示した。

(3) 半構造化面接の質問項目

予備調査の結果を踏まえ、コラージュ作品について話をする中での自己理解を促すための質問項目として、以下のように修正を施した。

- ① タイトルをつけるとするとどんなタイトルになりますか？
- ② どんなことを考えながら作りましたか？
- ③ どのようなことを表現しようと思いましたか？
- ④ コラージュを作る中で、自分について何か気づいたことがあれば教えてください。
- ⑤ 作品の中にあなたご自身、または自分に近いものがあるとすると、どの切り抜きにあたりますか？また、その理由を教えてください。
- ⑥ この作品は自分らしいなと思える作品ですか？また、その理由を教えてください。逆に、自分らしくないな（このあたりは意外だな）と思えたら、その理由も教えてください。
- ⑦ この作品の中で好きな切り抜きとその理由を教えてください。逆に、嫌いな（あまりいい感じではないと思う）切り抜きがあればその理由も教えてください。

- ⑧ ここまで話してきて、自分について何か気づいたことがあれば教えてください。
- ⑨ 改めてコラージュを作ってみた感想と、ここまでのやり取りで何か思ったことがあれば教えてください。

（４）分析方法

KJ 法（川喜田，1967）を使用した。KJ 法とは、集めた質的データからデータのエッセンスをメモしたカードをつくり、つくられたカード同士で類似していると思われるカードを集めて小グループにし、見出しをつけていく方法である。小グループの見出しをもとに、さらに大きなグループ編成をしていき、共通項を見出ししていく。

本研究においては、全制作者の語りの中で、自己理解に関わると思われた語りをカード化し、すべての質問項目において KJ 法を実施した。KJ 法実施の際、カード化した語りを質問項目ごとにまとめて分析を行った。なお、分析の信頼性を高めるため、KJ 法について経験豊富な心理学の専門家の指導を受けながら分析した。

３．結果

本研究では、それぞれの質問項目に対して得られた語りについて、質問項目別に KJ 法を行った。以下に質問項目ごとの分析結果を記載する。アルファベットは制作者を表す。

質問① タイトルをつけるとするとどんなタイトルになりますか？

検討の結果、17 枚のラベル、2 の大カテゴリー、3 の中カテゴリー、9 の小カテゴリーが見出された（図 1 参照）。

【好きなもの】

好きなものの切り抜きで作品を構成し、タイトルをそのまま「私の好きなもの」とつけた。

【時間軸を意識した表現】

『今の自分』や『それまでの自分』についてなど、時間軸を意識したタイトルをつけていた。「今の自分」（A）、「今まで」（B）、「自分の原点」（E）、「自分の変化」（K）といったタイトルがこれに当たる。

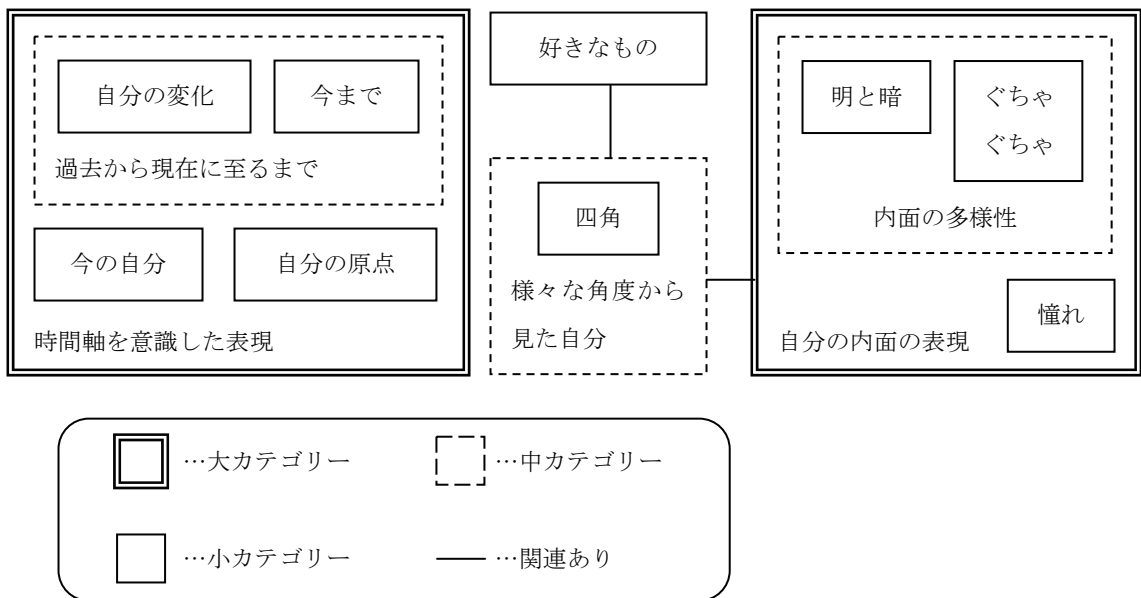


図1. 質問①についての分類

【自分の内面の表現】

自己の内面について表現することに重点を置いてタイトルをつけた。「自分って本当は違う部分もあるんじゃないか」（F）「色んな面があってぐちゃぐちゃなのが自分かなと思って」（C）という『内面の多様性』、「自分の憧れだし、自分のなりたい肖像って感じ」（G）という『憧れ』といったカテゴリが見出された。

【様々な角度から見た自分】

好きなものだけではなく、「人から見た自分」「自分の外見」「現在自分が考えていること」と、様々な角度から見た自分を画用紙の四隅に表現し、『四角』とつけていた。

質問② どんなことを考えながら作りましたか？

検討の結果、31枚のラベル、2の大カテゴリ、1の中カテゴリ、8の小カテゴリが見出された（図2参照）。

【制作過程における行為】

どのような段階を経てコラージュを制作したかについて語られたカテゴリである。

まず、テーマを与えられて「どうやって自分を表すか」といった『構成を考える過程』が存在した。その中で、『作業の最初に行っていた行為』として、『好きなもので作品を構成』しようとして探して

いたり、用意された雑誌をめくったときに何かを思い出させる写真に出会うということがある。

また、好きなものを探したり構成を考えたりする中で制作者にとって気になる切り抜きと偶然出会う。『切り抜きとの出会い』によって、作品の構成が決定したり、故郷のことを思い出す、誰かのことを思い出すなど、過去を想起することがある。

こうして、『構成を考える過程』を経て、「この写真は自分だと。これを本当の自分として、懂れってというか、になりたい自分を探そうと思いました」（G）というように、気になる『切り抜きとの出会い』、『構成の決定』がなされる。

【制作過程における想起】

コラージュを制作する中で過去を想起したカテゴリー。『切り抜きによって過去を想起』したパターンと『過去の想起によって自己理解』したパターンが見出された。

「あー、なんとかさんどうしてるかなとか、あのときなんとかくんはこんなこと言ってたとか考えてた」（L）と、昔のことや以前誰かが言っていたことなどを、切り抜きを探す中で思い出すことがあった。

また、「振り返ってみると、故郷って自分を作ってくれたというか、成長させてくれた大事なものなんだなって思いました」（E）「お酒飲むのが好きなんだけど、ひとりで飲むのは好きじゃなくて。で、東京が好きなんだけど、いろんなひとに会えるから好きで。で、東京好きだと思って貼って、お酒好きだと思って貼って、じゃあ一緒にお酒飲むひとのこと思い出したり、っていうことを考えると、お酒もちろん好きだけど、東京で一緒にお酒を飲むひとたちが好きなんだなー、とか」（L）とい

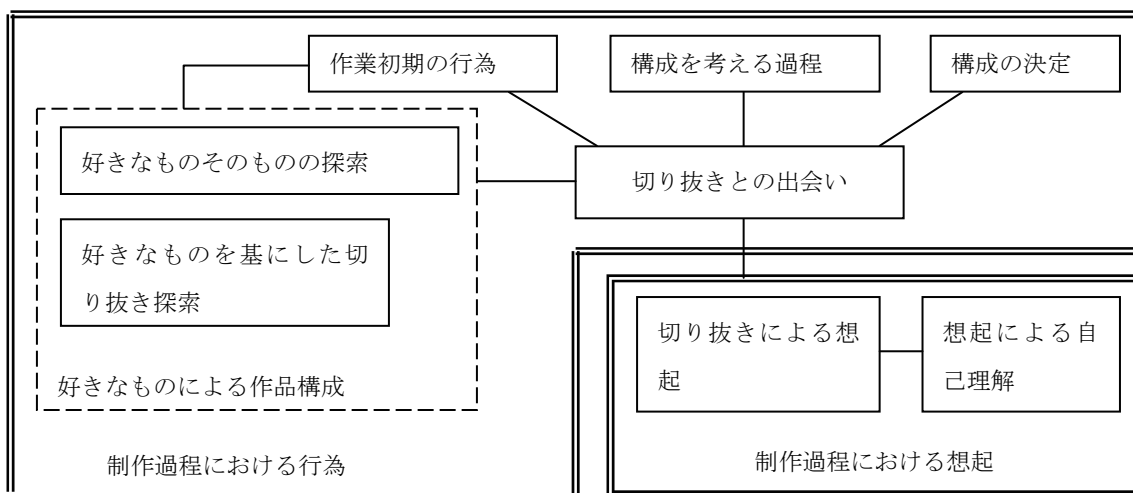


図 2. 質問②についての分類

ったように、切り抜きを通して過去や誰かのことを思い出して、その過去が大事なものだとして理解したり、思い出した対象が好きだったのだとして理解したりする例が見られた。

質問③ どのようなことを表現しようと思いましたか？

検討の結果、21 枚のラベル、5 の大カテゴリー、3 の中カテゴリー、1 の小カテゴリーが見出された（図 3 参照）。

【好きなもの】

好きなものを作品の中心テーマとして選んだ制作者がこのように答えていた。

【欲求について】

制作者自身になりたい自己像について語られたものについて《憧れ》とまとめた。また、「自分が見たいと思ってるものをイメージしながら貼りました」（E）という制作者もいた。

【自身の考え】

「そのまま自分が考えるもの・惹かれるものを貼ってみました」（C）など、制作者がそのとき考えていることについて表現できる切り抜きを選んで作品を作っていたと語られた。

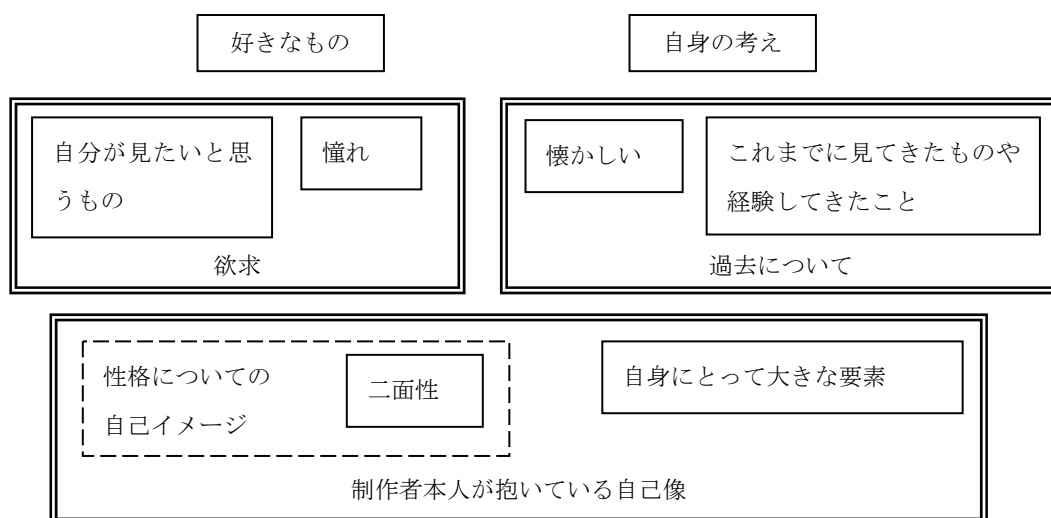


図 3. 質問③についての分類

【制作者本人が抱いている自己像】

自身の「二面性」をも含めた『性格についての自己イメージ』について語られた。また、制作者自

身の中で「自分をテーマとしたときに外せないもの」「ないと空っぽな感じ」と、なくてはならない大きなものであると感じられている、『自身にとっての大きな要素』について語られた。

【過去について】

自身が見てきたものや経験してきたことなど、過去について表現している制作者もいた。

質問④ コラージュを作る中で、自分について何か気づいたことがあれば教えてください。

検討の結果、33 枚のラベル、2 の大カテゴリー、1 の中カテゴリー、6 の小カテゴリーが見出された（図 4 参照）。

【制作態度からの自己理解】

作品を構成する際の、切り抜きのレイアウトの仕方、切り抜きの選び方・貼り方から、自分の性格や好きなことについて理解した様子を示すカテゴリーである。

「単純な自分」「欲張りな自分」など、自分の性格について、主に、惹かれる切り抜きや好きなものの切り抜きを単純に選んで貼っていくという『制作態度から再確認』していた。また、『普段の自分からすると意外な切り抜きの選び方』をして、こだわる性格だと自分で思っていたが、意外とこだわらないところもあるのだということに気づいた例も存在した。

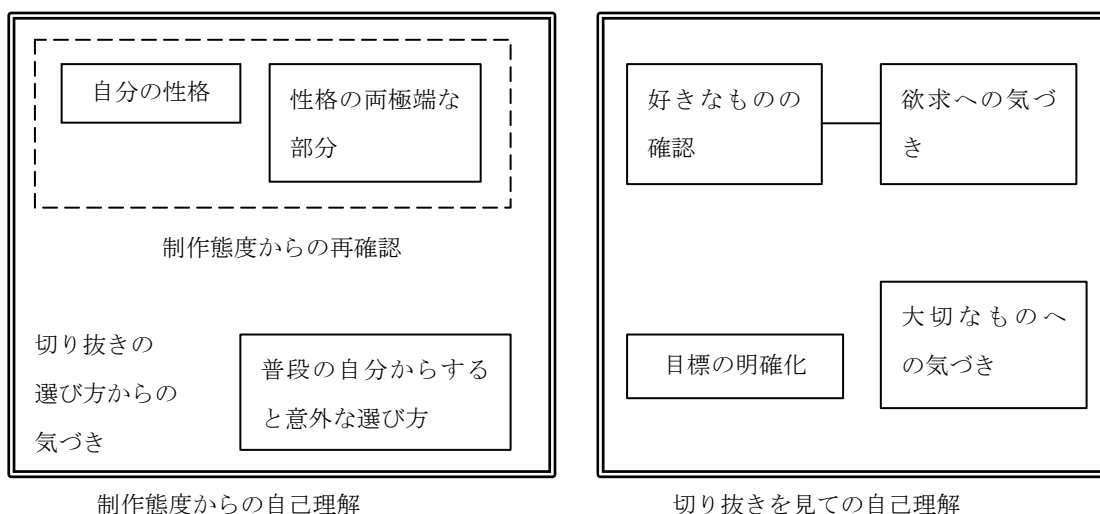


図 4. 質問④についての分類

【切り抜きを見ての自己理解】

コラージュを制作する過程には「切り抜きを見て選ぶ」という作業が存在する。「切り抜きを選ん

でいく」という制作過程で起こった自己理解についてのカテゴリーを示す。

切り抜きを貼って、「やっぱりこれが好きだった」と、『好きなものを再確認』したり、切り抜きを見て好きなものを確認した後に起きてきた『欲求に気づく』様子が見られた。

また、切り抜きを選んでいるときに惹かれる切り抜きと出会い、その切り抜きの内容が制作者に何らかのイメージを喚起させ、「自分自身が進路をどうするか考えなきゃいけない時期に来ていている考えるんですけど、この鳥のように社会に羽ばたいていきたいって思いがあります」（J）と、『目標が明確になる』パターンが見られた。

そのほか、切り抜きを選ぶ中で制作者本人の中で大きいと感じるものを連想させる切り抜きと出会い、気づきを得た例も存在した。「クラブでの生活とか、就活とかって、自分にとってすごく大きくなったなって思った」（B）「忘れたいようなことを忘れようと思ったけど、無理に消そうとしなくてもよかったんだな、そういうものがあるのを大事にしていかなきゃなって感じました」（E）など、切り抜きの内容が制作者本人にとって『大切なもの・大切にしたいもの』となっていくことがあった。

質問⑤ 作品の中にあなたご自身、または自分に近いものがあるとすると、どの切り抜きにあたりますか？また、その理由を教えてください。

検討の結果、22 枚のラベル、2 の大カテゴリー、1 の中カテゴリー、6 の小カテゴリーが見出された（図 5 参照）。

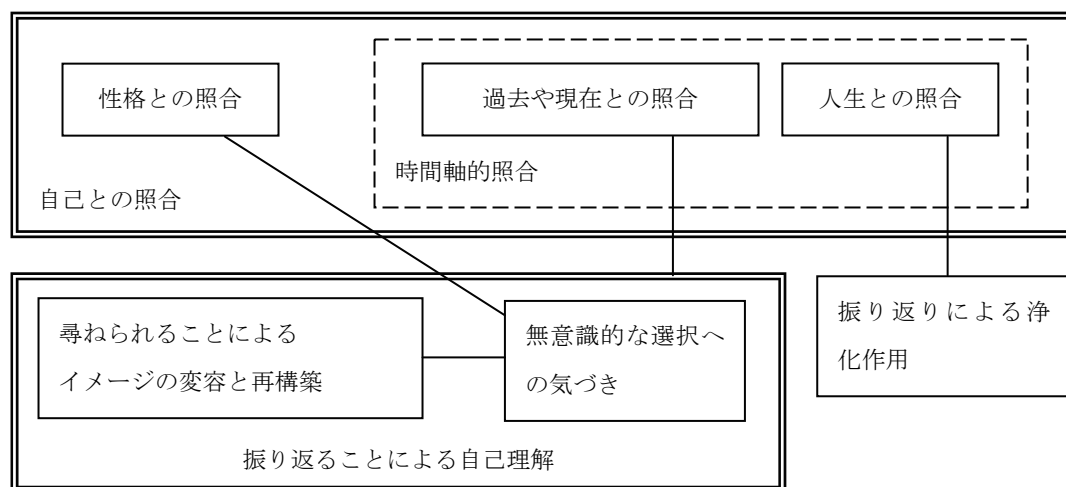


図 5. 質問⑤についての分類

【自己との照合】

「自分に近い切り抜きは？」と尋ねられて、どの切り抜きが自分に近いかを探す作業が行われる。『切り抜きの内容と自分の性格とを照合』することがあった。また、自分の過去や現在、「私の人生の半分

以上は、おばあちゃんの愛で育ってきたので、二人の絆を表すのはこれだ！って思って」（J）という語りに代表されるような、“自分の人生”といった『時間軸的な視点からの照合』が行われていた。

【振り返ることによる自己理解】

振り返りとして面接を行う中で得られた自己理解について示したカテゴリーである。

既述の【自己との照合】を行う際、「自分がいままで何を見てきたかって思いながら貼ったけど、聞かれたときにこれかなって思いました」（E）など、『聞かれることによって、切り抜きに対するイメージが自分自身のことに引き寄せたイメージへと構築されたり変容したりする』ことがあった。

また、話すことによって、切り抜きに対するイメージが自分自身のことに引き寄せられたイメージとして構築されるが、振り返って初めて思ったのではなく、制作中に無意識に感じていたかもしれないという言及もあった。

【振り返りによる浄化作用】

『人生との照合』を行い、それを“話す”ことによって「自分がモヤモヤしていることがどんどん浄化されていってる感じがします」（J）と、浄化作用が起きていると思われる発言があった。

質問⑥ この作品は自分らしいなと思える作品ですか？また、その理由を教えてください。逆に、自分らしくないな（このあたりは意外だな）と思えたら、その理由も教えてください。

検討の結果、28 枚のラベル、3 の大カテゴリー、3 の中カテゴリー、11 の小カテゴリーが見出された（図6 参照）。

【「自分らしい」と答えた群】

筆者より質問をされて「自分らしい」と答えた制作者が、作品の自分らしさの根拠について述べたものである。

『作り方によって』自分らしさについて確認したり、切り抜きの内容から自分について再確認した例や、「自分が作ったから自分らしい」と語った例が見られた。

【自分らしいとは思わなかった群】

【「自分らしい」と答えた群】とは反対に、「自分らしい」とは答えなかった制作者が、その根拠について述べたものである。

「完全ではないよね。自分が自分を完全に知っているわけではないから」（K）と、自分の知らない自分について意識していた語りと、

「できたものを見たときに、画像のひとつひとつを見ていけば、確実にぼくなんだけど、できたも

のを見て、「こんな感じかしら？」と」(L)

と、作品のイメージと自己イメージとのギャップがあるという語りが得られた。

【意外な側面に対する気づき】

自分の意外な側面についての気づきである。主に『自身の感情について気づく』パターンが見られた。「作り方で」「貼っていく中で」「出来上がりを見て」「話していて」「聞かれて」と、制作過程と振り返りの過程で気づきを得ることがあった。このとき、「自分は本当は～～だった」「～～しなかったのかも」と、これまであまり意識されていなかった自身の感情や欲求に気がついていくパターンが見られた。

また、「ここからカットしようかと思ったけど、完璧な写真だったから切らなかった。それは意外だったかも。こだわった。今までの自分は雑だったけど、細かくなったのかなって。こだわるようになった自分を偉いと思った。成長したなって話してて思った」(G)と、作り方を見て自分が成長したと語る制作者や、「優柔不断だから思いのほか時間かかるけど、思ったより自分が判断するのが早かった。本当に必要なときは意外と本気が出て早くなるのかな」(I)と、普段時間のかかることを意外と短縮できたと語る制作者もいた。

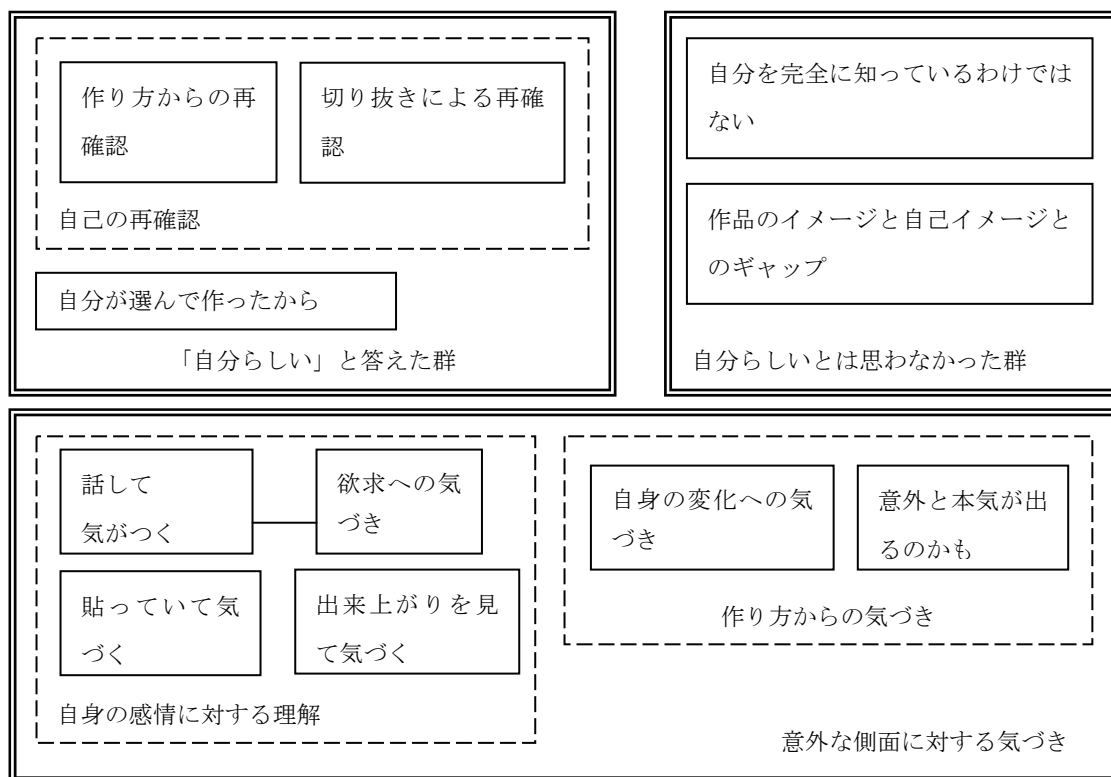


図6. 質問⑥についての分類

質問⑦ この作品の中で好きな切り抜きとその理由を教えてください。逆に、嫌いな（あまりいい感じではないと思う）切り抜きがあればその理由も教えてください。

検討の結果、21 枚のラベル、3 の大カテゴリー、9 の小カテゴリーが見出された（図 7 参照）。

【ポジティブなイメージ】

多くの制作者がポジティブなイメージを持って切り抜きを選び、特にポジティブなイメージを持った切り抜きを好きな切り抜きとして選択していた。

【そんなに好きではない切り抜き】

好きではない切り抜きについては、「特に思い出入れがない」という反応が多かった。

【切り抜きによる回想】

切り抜きの内容から「この湖。家の近くの湖に小さい頃よく行ってて、こういう感じの景色で懐かしくなった」（E）と、過去を想起する制作者もおり、さらにその中には、「話しているうちに色々思い出す」と、後に述べる『会話による回想の促進』につながっていく制作者もいた。その制作者は「過去を大事にしよう」と、【過去を受容】していた。

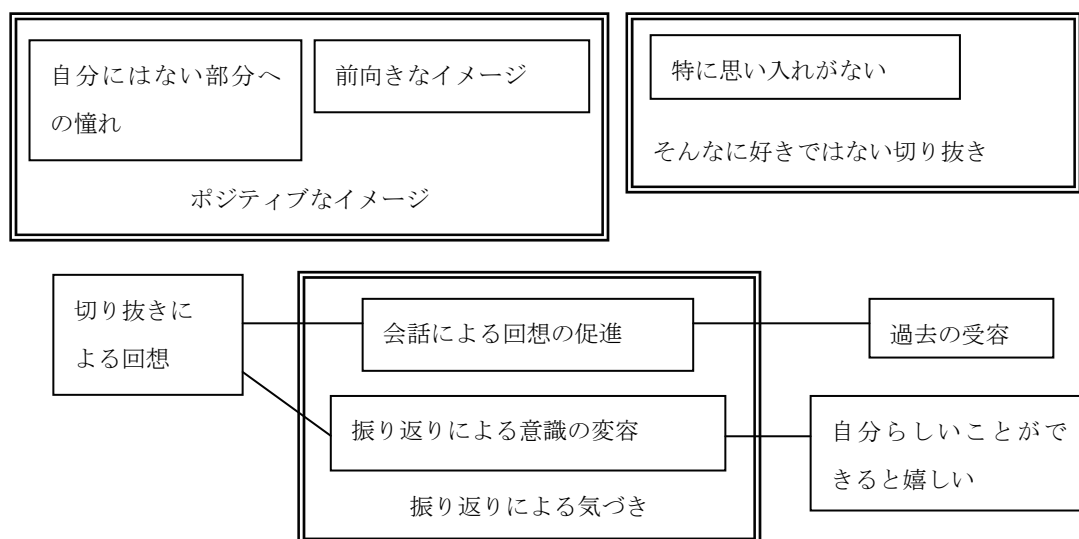


図 7. 質問⑦についての分類

【振り返りによる気づき】

振り返りとしてコラージュ作品についての話をする中で、また、作品自体を眺めることによって過去の想起が促進されたり、好きな切り抜きそのものが変わるという例が見られた。また、振り返りの

中で気づきを得て、「好きなことができる嬉しい」(I)と、ポジティブな気分変化をもたらしたということが推察される語りも得られた。

【過去の受容】

先の『会話による回想の促進』から派生したカテゴリーである。「昔のことをダメだと思っていた気がするんですけど、ダメじゃなかったなって。これからも大事だけど、今までの自分も大事にしているのがいいなって思いました」(E)と、過去の自分についてネガティブなイメージを持っていたが、「大事にしていきたい」と過去を受け入れていくと思われる発言であったため、【過去の受容】とした。

質問⑧ ここまで話してきて、自分について何か気づいたことがあれば教えてください。

検討の結果、31枚のラベル、13の小カテゴリー、2の中カテゴリー、5の大カテゴリーが見出された。

【再確認】

現在や過去の自分、以前から考えていたことについて再確認する。再確認して「自分は意外と元気」(C)だと気づく例も見られた。

【ネガティブな面への気づき】

制作者自身が、主に話のやり取りをしていく上での自らの欠点や、伝えることの苦手さとその理由について気づくことがあった。また、「夢に積極的ではない自分に改めて気づいた」(C)という例も見られた。

【ポジティブな面への気づき】

作品について話していくことで自分の好きなものや自分の性格について確認し、「自身が以外と元気である」ことや、自身の好きなところなど、『健康的な側面の気づき』を得る制作者もいた。また、「私の希望とか、夢とか、好きとか、そういうものが表れてるなって思います」(C)と、『作品には制作者のポジティブな面が表れている』ことに気づき、自身の現在の状態もポジティブであると理解した例が見られた。

「改めて自分がどんな人かって表せて言われたら、こうありたいみたいなものが入ってるかもしれないなって思いました。いま」(C)と、作品について振り返る中で『自分の理想や希望』について気づいた例も見られ、「自分の憧れとか理想像を見つめ直して目標を明確にした感じがした。これからこういうのを目標にして頑張りたいなって思った」(G)と、これからの『目標が明確になった』という制作者もいた。

そのほか、「いっぱい気づきました。自分の悩んでることとか、自分ってこれ好きやったんやって」(J) といったように、好きなものに対する好きな度合いや自分が悩んでいたことに対する気持ちが、『思っていた以上に強かったことに気づく』例が見られた。

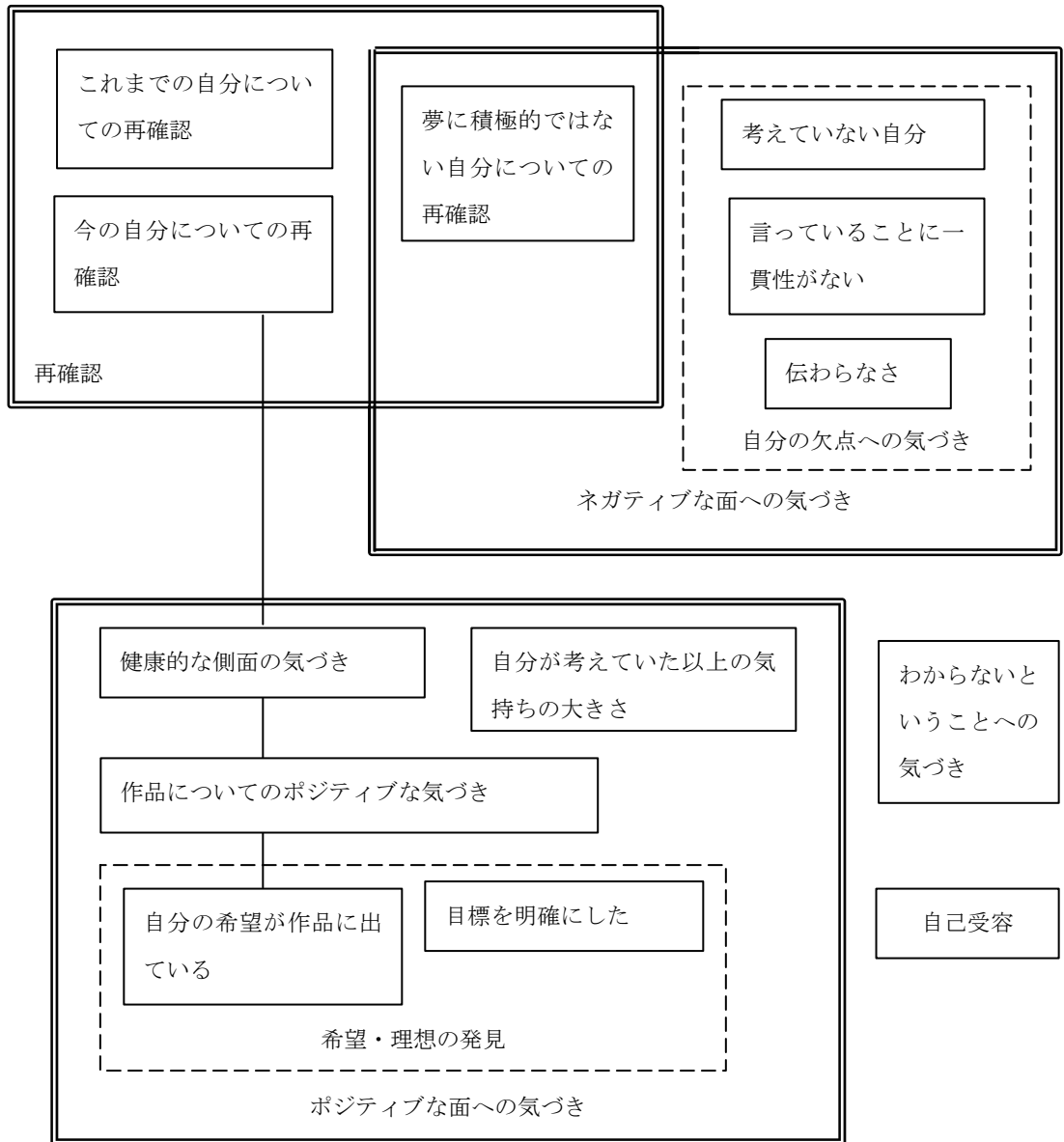


図 8. 質問⑧についての分類

【わからないということへの気づき】

作品について話す中で自分のある側面に気づき、「大体自分のことわかってるつもりなんです

けど、でももしかしたら、結構わかってないのかなって思いました」(C)と、自分にもわからない部分があったことに気づく様子が見られた。

【自己受容】

作品についての話をしていく中で、「嘘つけないのは直せないんだなって話してて思いました。これをきっかけに確信したというか。いい意味で」「強くなりたい、でもなれないかもって話が出てきたけど、認めた感じがしたかも」(G)など、自分のある側面について受け入れていく例も見られた。

質問⑨ 改めてコラージュを作ってみた感想と、ここまでのやり取りで何か思ったことがあれば教えてください。

検討の結果、23枚のラベル、3の大カテゴリー、13の小カテゴリーが見出された(図9参照)。

【制作過程について】

制作過程には、『好きなものを貼っていく制作態度』、「いざ、やれと言われると、やっぱり考えるじゃないですか、自分ってどんなのが好きだったっけ?とか」(C)と、『自分について考える過程』が存在することが語りから示された。

また、「自分のイメージが強くあって、「似てるんだけどちょっと違うもの」を自分のイメージにして貼るのが、嫌なんだな一つというのが、思った」(L)と語る制作者もいた。

作品を作るにあたってどのように写真を切り、画用紙の上に貼り付け、コラージュを構成していくのか、という『制作行為に制作者の性格が表れる』と語る制作者もいた。

【制作後の振り返りによる自己理解】

制作後の面接の中で起きた自己理解についてのカテゴリーである。

まず、自分について既に把握していた一面を『再確認』したという語りが得られた。

また、出来上がったコラージュ作品について話すことによって『自分の気持ちや考えについて整理』されたり、「質問がきっかけで、色々自分の思ってることがわかったなって。聞かれないと気づけないことってあるんだなって思いました」(E)と、『質問されることで気づきを得た』という制作者もいた。

そのほか、作品には「ポジティブな面だけが出ている」と語り、自分自身にはネガティブな面もあるはずだから、『自分すべては作品の中に表れてはいない』ということについて気づくことがあった。話途中で、制作中に一度考えたことを思い出して、「『後付け』が多かったですね」と語る制作者もいた。

『自身が考えきれていない』ことについて、「話してて気づいたのは、表現とか言い回しが通じな

いってこととか。普段から考えてることだとしても、「それはどういうことか」とか、ぼくは普段あんまり考えてないなって思った」（L）と、会話によって認識する制作者もいた。

「普段こうやってじっくりどうしてこう思ったかとかどうしてこの写真選んだんやろとかって、なんでとかを突き詰めていくことがあんまりないので、話すことってすごい大事なんやなって、話してて自己発見できるんやなって思いました」（J）と、作品について話すことが自己理解につながったと語る制作者もいた。

【自己理解のきっかけ】

「自分らしさを、考え直すきっかけになったなあと思います」（C）など、自分について考えるきっかけになったという制作者や、「自分を知るのにいいんだなって感じました。全部貼って、話をしていくことで「自分が出てるんだな」って思いました」（E）と語り、振り返りをも含めたコラージュ制作が【自己理解のきっかけ】となった制作者もいた。

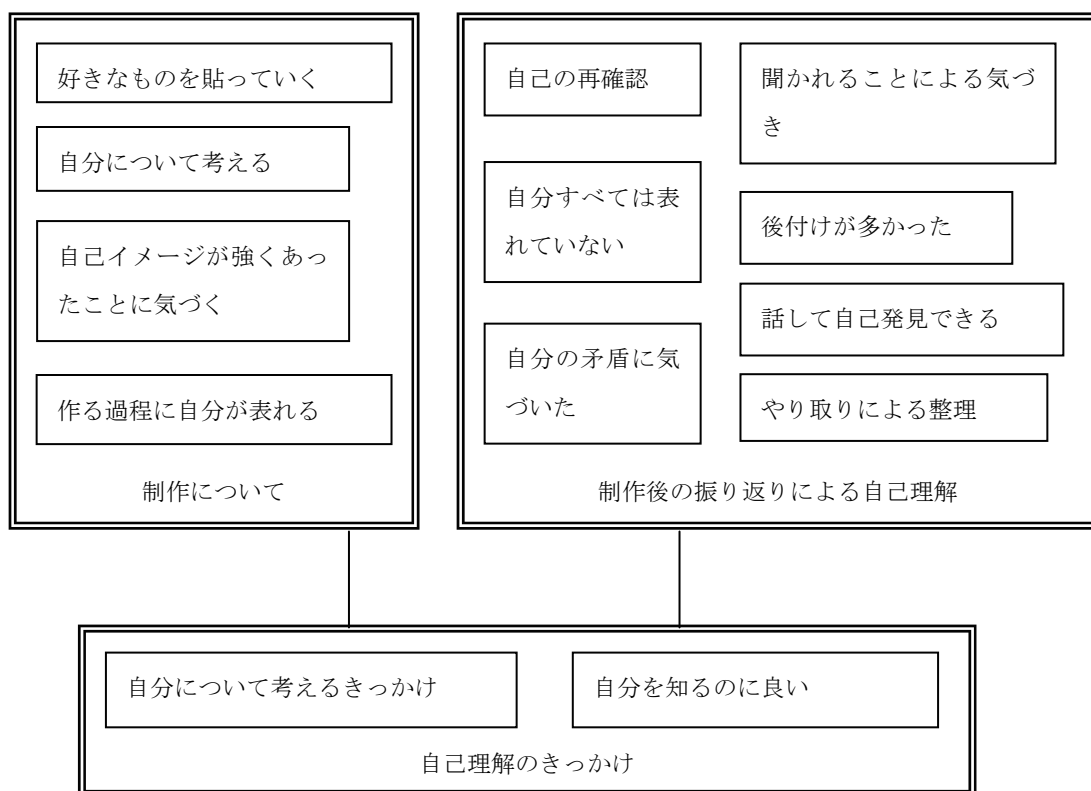


図 9. 質問⑨についての分類

IV. 考察

本研究の目的は、コラージュ制作による自己理解効果について、コラージュ作品を制作した制作者の語りをもとに検討することである。リサーチクエストンは、【制作過程において制作者がどのような自己理解体験をしているか】ということと、【振り返りにおいて制作者がどのような自己理解体験をしているか】ということの二点である。二点のリサーチクエストンに基づき、KJ法の結果抽出されたカテゴリーから、制作過程における自己理解の特徴と、振り返りにおける自己理解の特徴について考察する。

1. 制作過程における自己理解の特徴

（１）制作過程において何が行われているか

コラージュ作品の制作過程における自己理解の特徴を考察するにあたって、まず、制作過程において何が行われているのか見ていく。

①制作者は、『自分』というテーマを与えられて、まず思考する過程を踏む。その過程は、「自分はどんなものが好きだっただろう」、「自分はどんな性格だっただろう」と自分自身の特徴について考えたり、「どのようにして自分を表すか」という、作品の構成について考えたりする過程である。

あるいは、『自分』というテーマを与えられて、「好きなもの」を貼って作品を構成しようとする。その際、好きなもののイメージが先にあって切り抜きを探すパターンと、切り抜きを探すうちに「好きなもの」が見つかって貼っていくというパターンがある。

②考えながら貼り付ける切り抜きを探す。

③切り抜きを探す中で制作者にとって気になる切り抜きと出会う。

④気になる切り抜きとの出会いによって、作品の構成が決まったり変更が生じたりする。⑤構成の決定と変更を繰り返しながら制作が進んでいき、作品が完成する。

以上のような制作過程を経て、コラージュ作品が作られていく。作品に表現されたものは、「好きなもの」、自分の見たいものや憧れといった「欲求」、「現在自分が考えていること」、「自身の性格についてのイメージ」や「自身にとって大きな要素」、「自身の過去」などであった。

（２）制作過程における自己理解

制作過程においては、切り抜きを探すという作業が存在する。その中で、切り抜きの内容から気づきを得たり、自分自身について再確認することがある。また、切り抜きの選び方や切り方、レイアウト

トの仕方といった作業態度から自己を再確認したりする。

切り抜きの内容を見て、何らかのイメージが起こったり、過去のことや誰かのことを思い出したりする、ということがある。そして、イメージしたり思い出したりして、自分についての何かに気がつく。たとえば、自分の過去は大切なものであった、その誰かを思い出すということは、その人のことが好きだった、など。このような気づきを得たのは、「思い出す」という行為の根拠を、「大切なものだから思い出すのだ」と解釈しているからであると考えられる。

（３）まとめ

制作過程における自己理解についてまとめると、以下の５点のようになると考えられる。

- ①制作者は、作品を制作していく過程で出会う切り抜きの内容によって、自分について把握していることを再確認する。
- ②制作者は、切り抜きの内容から自身について再確認することによって、何らかの欲求について気づくことがある。
- ③制作者は、切り抜きの内容を見て、過去や何らかのイメージを想起することがある。
- ④制作者は、切り抜きの内容から過去や何らかのイメージを想起することによって、自身の目標が明確化したり、自身にとって大切なものに気がついたりする。
- ⑤制作者は、作品を制作するにあたって、制作者自身の切り抜きの選び方・貼り方・レイアウトの仕方を見て、自分の性格について再確認したり、意外な部分に気づいたりする。

KJ法によって抽出されたカテゴリーから、コラージュ作品の制作過程における自己理解の特徴は、『再確認』・『想起』・『気づき』の三つであると考えられる。『気づき』については、質問②から発生した大カテゴリー・【制作過程における想起】から、『再確認』や『想起』を経て起こると思われる。以下に語りの一例を紹介して、『再確認』・『想起』・『気づき』の関係について考察したい。

「お酒飲むのが好きで。で、東京が好きなんだけど、いろんなひとに会えるから好きで。で、東京好きだと思って貼って、お酒好きだと思って貼って、じゃあ一緒にお酒飲むひとのこと思い出したり、っていうことを考えると、お酒もちろん好きだけど、東京で一緒にお酒を飲むひとたちが好きなんだなー、とか」（L）

例えばLさんは、切り抜きの内容によって、好きなものについて『再確認』をしている。その次に「一緒にお酒を飲むひとのこと」を『想起』し、「一緒にお酒を飲むひとたちが好き」なのだと『気づき』を得ている。このLさんの語りは質問②のときに出現した語りであるが、「一緒にお酒を飲む

ひとたちが好きなんだな」という『気づき』は、質問④から発生した小カテゴリーである、「大切なものへの気づき」であると捉えることができるのではないと思われる。

また、『気づき』を得る要因として、切り抜きとの出会いが大きなウェイトを占めていると考えられる。切り抜きの選び方・貼り方・レイアウトといった制作行為から自身について『再確認』することはあるが、制作行為から『気づき』を得た例は、本研究においては『再確認』よりも少ない。切り抜きとの出会いは偶然の要素が支配しているとも言えるが、切り抜きとの偶然の出会いが重なって「思わぬ効果（齋藤，1999）」が生み出されることもあり得る。齋藤（1999）が指摘している「思わぬ効果」とはコラージュの表現効果のことを指しているのだが、切り抜きとの出会いによって『気づき』を得ることも「思わぬ効果」の一つとして数えられるのではないかと考える。

2. 振り返りにおける自己理解の特徴

（１）振り返りににおいて何が行われているか

本文において、半構造化面接の過程を「振り返り」と一言で表現しているが、そこにおいて何が行われているのか、ここで確認しておきたい。「出来上がった作品について振り返る」という作業は、以下のような４つの行為によって成り立っていると考えられる。

- ①筆者（セラピストなど、作品と一緒に眺める人）から質問される
- ②質問されることによって考えたり思い出したりする
- ③質問に答える
- ④出来上がった作品そのものを眺める

作品について振り返るにあたって、筆者が制作者に対して質問をする。制作者は質問に対する答えを考えたり、答えを考える中で何かを思い出したりする。そこから、筆者に対して質問の答えを返す。この、「質問される⇒考えたり思い出したりする⇒応答する⇒質問される」といったやり取りの繰り返しによって、制作者と一緒に振り返る人との『会話』が成り立つ。会話が成り立っている上で、『出来上がった作品そのものを制作者が眺める』という行為が入ってくる。つまり、『作品を眺めながら作品について会話をする』という行為が「作品についての振り返り」であると思われる。また、『出来上がった作品そのものを制作者が眺める』という行為は、質問されてすぐに行われることもあれば、考えたり思い出したりしている最中に行われることもあり、また、質問に答えている途中に行われることもあると考えられる。

（２）振り返りにおける自己理解

KJ 法によって抽出されたカテゴリーから、制作者は作品についての振り返りを行う中で、『再確認』・『整理』・『気づき』・『自己受容』のいずれかを得ていると思われる。

①『再確認』

これは制作過程においても出現したが、振り返る過程においても、以前から考えていたことや自身の性格など、自分について日頃から把握していたことについて再確認する、ということがある。

②『整理』

『整理』は、作品について筆者が質問し、制作者が答える、という会話のやり取りを経ることによって起こると考えられる。

「話していて、やり取りに関しては、話すうちでもっと深く考え直させられるというか、やっぱ言語化すると、言語に表すって、もう一回自分の頭で、考えて噛み砕いてからじゃないと、言葉にできないじゃないですか。だから、すごく整理される気がしました」（C）

という語りのように、作品と自分自身のことを結びつけながら考えたことを言語化することによって、自分の考えや気持ちが整理されるのだと考えられる。

③『気づき』

『気づき』を得るまでの過程は、いくつか存在すると考えられる。まず、筆者から質問されることによって何かに気づくことがある。制作者は、台紙に貼られた切り抜きがどのような理由によって選ばれたのかについて、聞かれることによって考える、という過程を経て気づきを得るのだと考えられる。その過程について、切り抜きを選択した理由について突き詰めることで「こういうことで貼ったけれど、こういう理由もあったかもしれない」と、制作者自身が切り抜きや作品に対して意味づけを行い、それによって気づきを得ているのだと思われる。「自分に近い切り抜きはどれですか？」と聞かれて始まる【自己との照合】も、切り抜きに対する意味づけであると考えられる。

作品について話す中で『気づき』を得るパターンも存在する。話す中で自分の性格などについて『再確認』をし、たとえば「意外と元気かもしれない」と、自身の現在の状態について気づきを得ることがある。作品に表されたものが自分のすべてではなく一つの側面であったり、希望や理想であったということに気づくということも、作品について話すことで起こると考えられる。また、話しているうちに好きな切り抜きが変化していくということや自身の意外だと思う部分に対する気づきも起きたが、これらも、作品について話す過程で作品や切り抜きに対する、制作者自らの意味づけが起きたことに

よって生じたと考えられる。

また、制作者自身が筆者とのやり取りの仕方を振り返り、自身の側面について気がつくというパターンも起こり得る。本研究においては、話のやり取りをしていく上での制作者自身の欠点に気づくことがあった。

④自己受容

ここで言う『自己受容』とは、自身の過去や自身のある側面について「受け入れられた感じがする」、「大事にしていきたい」という語りを指す。『自己受容』が発生するきっかけは、「作品について話す」ことであると思われる。制作者が、質問されることによって切り抜きの意味について考えたり、話しながら過去について思い出したりすることがある。

「結構昔のことをダメだと思ってた気がするんですけど、ダメじゃなかったなって。これからも大事だけど、今までの自分も大事にしていきたいのがいいなって思いました」 (E)

「強くなりたい、でもなれないかもって話が出てきたけど、認めた感じがしたかも」 (G)

といったように、作品にまつわる自身のことについて話していくことで自己受容が起こる。その要因については、

「自分がモヤモヤしていることがどんどん浄化されていってる感じがします」 (J)

という語りに象徴されるように、話すことによって浄化作用が起きているからではないかと推測する。また、赤塚（2005）が指摘するように、コラージュを制作することそのものが自己受容を促した可能性もあるが、本研究で得られた語りからは制作行為が自己受容を促したことを示唆する語りは見当たらない。

（３）まとめ

振り返りにおける自己理解についてまとめると、以下の６点のようになると考えられる。

- ①制作者は、作品についての質問をされることで作品や切り抜きに対して意味づけを行う。
- ②制作者は、作品について一緒に振り返る人と話すことによって、自分について再確認することがある。
- ③制作者は、作品について話すことによって、自身の考えや気持ちについて整理できることがある。
- ④制作者は、出来上がった作品を眺めながら作品についての話をする中で気づきを得ることがある。

⑤制作者自らが作品や切り抜きに対して意味づけすることによって、気づきを得ることがある。

⑥制作者は気づきを得ることにより、自身のある側面を受容できるようになることがある。

振り返る過程における自己理解の大きな特徴は、作品を眺めながら作品について話す中で、制作者が作品や切り抜きに対して意味づけを施すことであると考えられる。ここで、意味づけを裏付けていると思われる典型的な語りを紹介する。

「いつも何か作るときって、意図とか目的とか決めて作るんですけど、目的も何も考えなくて、後づけが多かったかもしれないですね。話してて、「あ、そういえば」って思い出すことが多かった」

(F)

この語りは、制作過程において考えていたことを、話をする中で想起することについての語りである。しかし、「後づけ」という行為も、「作った後に意味づけること」という意味として捉えることができるのではないと思われる。

3. コラージュ制作による自己理解効果とは

ここまで、制作過程における自己理解の特徴と、作品について振り返る過程における自己理解の特徴について考察してきた。ここで、コラージュ制作による自己理解効果とは何かについてまとめていきたい。

制作過程においては『再確認』・『想起』・『気づき』が起きており、振り返りにおいては『再確認』・『整理』・『気づき』・『自己受容』が起きていると考えた。『再確認』と『気づき』は制作過程・振り返る過程ともに共通しているが、そこに至る過程は制作過程と振り返る過程とでは異なる。

制作過程における『再確認』は、制作者自らが、自身の作品の作り方について眺めることによって起こる場合と、制作者が切り抜きの内容を眺めることによって起こる場合とがある。また、『気づき』を得るための要因として、切り抜きとの出会いによって何らかのイメージを『想起』することが考えられる。以上から、制作過程における自己理解は、切り抜きとの出会いによるところが大きいと言えるだろう。

振り返りにおける『再確認』は、作品についての話をする中で、制作者が自身の性格や考えについて再確認するというものである。また、振り返りにおける『気づき』は、制作者が筆者から質問を受けたり、作品を眺めながら話をする中で、作品や切り抜きに対して意味づけを施すことによって得られると考えられる。

振り返りにおける自己理解の特徴として『自己受容』を挙げた。振り返りにおける自己理解独特の特徴となったが、これは話すことによって浄化作用が起きているからではないかと推測する。また、

切り抜きに対する意味づけが施された上で話が展開していることも要因の一つとして考えられる。

以上から、コラージュ制作による自己理解効果は、切り抜きや出来上がった作品について、制作者自らが意味づけを行うことによって起こるものであると考えられる。振り返りにおける『気づき』の要因のみならず、制作過程における『想起』も、制作者が、過去に体験してきたものや出会った人々を思い出させるものとして自ら意味づけを行った結果起こった体験であると思われる。制作者自らによる意味づけは、佐々木・下山（1998）が指摘している「自己解釈」であると言えるだろう。佐々木・下山（1998）は、「コラージュ療法とは、治療者とクライアントが面談をして、その内面を理解し、相互の人格的交流を通して、クライアントが日常に復帰できるよう援助するものだが、その過程で、クライアントが、場合によっては治療者もコラージュ作品を制作し、その作品を自己解釈したり、相手に解釈してもらったりして自己理解を深めてゆくというのが特徴である」と述べている。つまり、作品に対し「自己解釈」を施すことが、自己理解に繋がる行為であると言えるだろう。

4. 今後に向けて

本研究は、コラージュ制作による自己理解効果という、コラージュ研究においてあまり焦点の当てられていない視点からアプローチし、コラージュの制作過程と振り返りの過程、どちらにおいても自己理解が起きていたことが見出された。

また、本研究を通して、コラージュ療法の特色を以下のように考える。

①作品を構成するのにレディ・メイド（既製品）のイメージ（写真や文字など）を使用する。そのため、絵を描くことに抵抗のある人でも気軽かつ手軽に作品を作ることができる。また、砂箱に置いていく玩具を壊すなどして変形させることのできない箱庭療法とは異なり、コラージュに使われるイメージは一部を切り取ったり、最初に貼り付けたイメージの上にさらにほかのイメージを重ね貼りしたりすることもできる。このような安全性が、制作者の気づきや自己受容を促しやすいのではないかと考える。

②本研究で考えられた「制作者による意味づけ」の自由度の高さも特徴であると思われる。コラージュの制作者（クライアント）自身が「ああかもしれない」「こうかもしれない」と、作品を通して自分の内面についてあれこれと考えを巡らせ、自分の作品について自己解釈を施し、制作者が気づきを得ていく。得た気づきやそれについての語りをセラピストが知ることができれば、それは、セラピストがクライアントを理解するのに大いに有用なのではないかと考える。

しかし、本研究において見出された自己理解効果は、サンプル数が少ないため必ずしも一般化でき

るとは限らない。また、『再確認』か『気づき』か『自己受容』か、制作者によってどの効果を得るかは未知数であり、「必ず自己理解効果を得ることができる」という風に断言できるものではない。そのため、制作者によっては、まったく自己理解効果が得られない可能性も否定はできない。セラピストが制作者とどのようにやり取りをすれば『気づき』や『自己受容』が起こるのかについても本研究では明らかにはなっておらず、質問項目や制作者の語りに対する応答の仕方など、今後の研究の余地はまだ残されているように思う。

また、本研究は確固たる仮説に基づいて行ったわけではなく、探索的に検討した向きが強い。青木（2000）が指摘するように、コラージュの見方に対する標準化が難しいところであり、青木（2000）から10年余り経った現在もその状況は続いている。コラージュ療法の用途を確たるものにし、また、コラージュ療法が、制作した人々にとってより役立つものとしていくべく、今後の研究へとつなげていきたい。

<付記>

本論文を執筆するにあたりご指導くださいました、創価大学教育学部教授・園田雅代先生に心より感謝申し上げます。

参考文献

- 赤塚絵里（2005）：自己コラージュ制作による自己受容度の変化、およびその表現——大学生女子を対象として——臨床心理学研究（東京国際大学大学院臨床心理学研究科紀要），3，13－25
- 青木智子（2000）：コラージュ技法・療法の現状と課題——コラージュ技法の解釈，現状の成果と問題点——カウンセリング研究，33(3)，323－333
- 青木智子（2001）：コラージュ集団集合法・集団個人法——職業訓練校における自己開発を目的としたコラージュ制作——産業カウンセリング研究，4(1・2)，17－26
- 青木智子（2005）：コラージュ療法の発展的活用 風間書房
- 青木智子（2011）：コラージュ技法・療法の現状と課題——2000年以降の研究動向——カウンセリング研究，44(2)，167－178
- 今村友木子（2001）：分裂病のコラージュ表現——統一材料を用いた量的比較——名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（心理発達科学），48，213－225
- 今村友木子（2004）：印象評定を用いた統合失調症者のコラージュ表現の分析 心理臨床学研究，22(3)，217－227
- 入江茂（1999）：現代絵画におけるコラージュの発想の意義——ピカソのキュビスムの時期を中心に——現代のエスプリ，386，33－41
- 石口貴子・島谷まき子（2010）：コラージュ継続制作における心理過程 昭和女子大学生活心理研究所紀要，12，63－74
- 川喜田次郎（1967）：発想法 中公新書
- 河本真理（2007）：切断の時代——20世紀におけるコラージュの美学と歴史——ブリュッケ
- 間島富久子・岡山征史郎・太田百合子・川田まり・藤井康子・関口敦・荻部正巳・石川俊男（2007）：集団コラージュ療法が摂食障害入院患者に有用であったと考えられた1例 心身医学，47(2)，123－131

- 森谷寛之（1999a）：コラージュ療法の実際 現代のエスプリ，386，29－31
- 森谷寛之（1999b）：コラージュ療法の起源と発展 現代のエスプリ，386，9－28
- 中井久夫（1993）：コラージュ私見 コラージュ療法入門，森谷・杉浦・入江・山中編，創元社，137－146
- 西村喜文（2006）：非行傾向生徒に対するグループ・コラージュの試み 心理臨床学研究，24(3)，269－279
- 齋藤眞（1993）：コラージュ・イメージについて コラージュ療法入門，森谷・杉浦・入江・山中編，創元社，183－196
- 作田郁美（2009）：コラージュのカタルシス効果に関する実証的研究 一切り抜く行為と貼り付ける行為の観点から— 志學館大学大学院心理臨床学研究科紀要，3，31－39
- 佐野友泰（2001）：コラージュ作品の特性とビリーフの関連 日本教育心理学会総会発表論文集（43），399
- 佐野友泰（2002）：コラージュ作品の解釈仮説に関する基礎的研究 —コラージュ作品の客観的指標と YG 性格検査，MMPI との関連— 日本芸術療法学会誌，33(1)，15－21
- 佐野友泰（2003）：コラージュ作品の解釈仮説に関する基礎的研究Ⅱ —コラージュ作品の客観的指標とストレス対処行動の関連— 日本芸術療法学会誌，34(2)，33－38
- 佐藤静（2002）：コラージュ制作者の性格特性と作品特性 心理学研究，73(2)，192－196
- 岡田敦・河野莊子（1997）：コラージュ表現とその治療的意義について 名古屋造形芸術大学紀要，3，61－72
- 佐々木一也・下山寿子（1998）：コラージュ療法の解釈学的基礎づけへ向けての一構想 立教大学教育学科研究年報，41，17－36
- 新潮社（1985）：新潮 世界美術辞典
- 杉浦京子（1991）：コラージュ療法の治療的要因と特徴について 日本医科大学基礎科学紀要，12，21－28
- 杉浦京子（1992）：コラージュ療法の基礎的研究Ⅰ —表現特徴の発達に関するパイロット・スタディー— 日本医科大学基礎科学紀要，13，13－38
- 杉浦京子（1993）：コラージュ療法の基礎的研究Ⅱ —表現特徴の発達に関するパイロット・スタディー— 日本医科大学基礎科学紀要，14，11－34
- 杉浦京子（1994）：コラージュ療法 —基礎的研究と実際— 川島書店
- 杉浦京子・鈴木康明・金丸隆太（1997）：集団コラージュ制作の効果 —社会心理学的，臨床心理学的考察— 日本医科大学基礎科学紀要，23，1－15
- 鋤柄のぞみ（2005）：コラージュ・アクティビティに伴う内的体験の変化 —孤独感を制作テーマにして— 心理臨床学研究，23(4)，492－497